

【隠し味に恋心を少々】

愛されたがり。／しも

「そういえば、長義くんが本丸に来てもうすぐ一年だね。その日に食べたいものはあるかな、リクエストがあれば聞くんよ」

燭台切の楽しみに弾んだ声は、国広の足を床に縫い付けけるに十分だった。もうすぐ夕餉の時間だというのに、どうしても空腹感が堪えられない。それこそ今まさに夕餉の支度中だろう厨に行けば、手伝う代わりにと何か味見をさせてくれるのではないか。そんな下心を見透かされ、入室禁止を言い渡されたような気分だ。

もちろん、実際には違う。燭台切はただ長義に話しかけたただけであるし、国広が顔を覗かせればいつものように笑いながら迎え入れてくれるだろう。味見をしに来たのかな、なんて。そう、国広が味見したさに調理の手伝いを買って出るのは日常茶飯事なのだ。

問題は長義である。なぜなら国広は、長義のいる空間に立ち入ることを許されていないのだ。そうと知らずに入ってしまうことはあるけれど、今回のように、長義が先にいると知った上でそこに加わることはできない。知らずに入ってしまった場合

だって、それなら仕方ないと許される訳ではないのだ。長居しないようすぐに用を済ませ、退散しなければいけない。掟は例外を許さない、厳しいものだ。

それゆえに、いくら厨に入りたくても今の国広は空腹を訴える腹をさすりながらすすぐと自室に戻るしかない。長義が中にいると、燭台切の声で知ってしまったから。

ただその問題というのは、国広が自分で勝手に作り上げたものだ。何らかのトラブルを起こしたために審神者による接触禁止令が出されているという訳ではないし、長義にお前と同じ空間にいることは不快だと拒否された訳でもないのだから。前者はさておき、後者はむしろ長義側に問題があると見なされることだろう。

長義は国広に対して、実力を示せだとかがっかりさせるなどとか、常に発破をかけている。それは己が山姥切国広の本歌であるという意識のあらわれであり、山姥切国広は己の写しであるという意識のあらわれである。

その意識をきちんともっている長義が、国広を同じ空間から排除するようなことをするはずがない。長義の選んだ在り方とではないけれど、粗末に扱ったり理不尽に冷たくしたりすることは決してないのだ。

『待たせたな、お前達の死が来たぞ!』

夜に輝く銀の髪、鮮やかな碧い瞳、凜とした立ち姿、迷いのない太刀筋。敵の首を落として、刀を払い、ふつと息を吐いてから鞘に納める一連の流れ。

それは長義が本丸に顕現して、初めてともに出陣した時のこと。長義を形づくるもののすべてが、長義を中心に流れる時間のすべてが美しく、国広の心は一瞬にして奪われた。国広は長義に、己の本歌に恋をしていた。

そう、つまり、国広はただ恥ずかしいのだ。長義と同じ空間にすることが、頬が熱を帯びていることに気づかれるのではないか、鼓動が速まっていることに気づかれるのではないか。挙動も言動も、その何もかもが長義を前にするとどうにかなくなってしまつて、違和感のないよう振る舞える自信がない。

長義がいる空間で平常心を保つことの難しさと、長義がいる空間を避けることの簡単さ。天秤にかけることなく、国広は後者を選んだ。本丸には多くの刀剣男士がいるし、そもそも普段はまったく違うコミュニティに属している。関わらないことは決して、不自然なことではないのだ。

もし仮に不自然だったとしてもやはり国広は、長義を避ける

ことを選ぶだろう。この恋心は、何があっても絶対に隠し通さなければいけないものだから。

「……栗ご飯、かな」

栗ご飯。自室に戻ろうとした国広の耳は、長義のリクエストを逃さず拾った。勝手に長義に恋をして勝手に長義を避けなければいけないという決まりを作つて、そのくせ長義のことを知っていた。自分のそういった、勝手さや浅ましさ国広は心底嫌いであつた。

長義が顕現したのは、葉が鮮やかに色づいた十月の末日である。国広の記憶が正しければ、その日の夕餉も栗ご飯だったはずだ。他にも南瓜の煮付けであつたり秋刀魚の塩焼きであつたり、長義が本丸の仲間になったことを祝うべく、いわゆる秋の味覚というものが食卓にずらりと並んでいた。

なるほど栗ご飯、あれを長義は気に入っていたのか。先ほどの自己嫌悪はどこへやら、国広は良い情報を得たと密かに表情をゆるめながら今度こそ自室へと戻った。何か味見をさせてもらおうと厨に向かうほどの空腹感、もうすっかりなくなつてしまつていた。

「……さて、拾うか」

それから数日後、国広は本丸の裏手にある大きな山の中にいた。栗拾いのためだ。長義を祝うための栗ご飯、その栗を自分で用意しなかったから。

長義が顕現して一年を迎えるまで、あと四日。栗は収穫後すぐに食べるより、数日間冷蔵保存する方が甘みが増す。熟成されるのだ。本当は当日の朝に拾いに行こうかと思っただけだけど、国広は長義に一番美味しい栗ご飯を食べてもらいたいからと栗についてあれこれ調べたのだ。

だからこそ四日前の今日、栗拾いにやってきた。大きな籠を背負い、軍手をして、裏山で一等大きな栗の木を目指して。

『……へえ、この栗ご飯に入っているのはお前が拾ってきた栗なのか。まあ、優をやっても良い』

イガを外しては籠へ、イガを外しては籠へ。国広は黙々と栗を拾い続けた。長義が喜んでくれたら良い、褒めてくれたら良

い、少しでも想いが伝われば良い。鉄の掟で己を縛っておきなからも、そんな幸せな妄想を展開させてしまおう。

本当は、夢を見たことがある。長義と結ばれる夢を。ただそんな日が来ることはありえないし、長義の前で平常心を保つか長義を避けるか、後者を選んだのは他でもない国広自身。一度そう決めたのなら、貫かなければいけない。国広は自分を戒めるように首を横に振り、ただひたすら栗を拾い続けた。

大きな籠はやがて満杯となり、背負うのに一苦労する重さになっていった。けれどあと少し、もう少し。栗が足りないと長義は、持てる者として周囲に与えてしまうから。

長義を祝うための食事なのだから遠慮せずたくさん栗を食べてほしいし、他の仲間達だって皆栗ご飯は好きなのだ。全員が満足する量には、まだ足りない。秋しか食べられない特別なごちそうであるからこそ、自分の限界を試すような気持ちが国広にはあった。

「……………これくらいあれば、さすがに足りるだろう」

そして国広は文字通り、栗の山を背負うことになったのである。重さとバランスの取りづらさで少しふらついてしまうけれ

ど、まったく苦しくなかった。

この大量の栗は、これから四日間かけて熟成される。甘味が増して美味しくなる。その美味しくなった栗を、燭台切に料理してもらう。

長義はきつと喜んでくれるだろう。自分の大好きな栗ご飯が去年よりもさらに美味しく、最高の形となって出てくるのだから。また他の仲間達も、美味しい美味しいと喜んでおかわりするはずだ。俺の分の栗が少ないだとか喧嘩することなく、全員が幸せな気持ちになれる。

国広にあったのは、そんな未来の幸福感だけだった。

「……な、……っ！」

しかし、幸せでいっぱいといった様子の国広の前に困難が立ちはだかる。本丸へと続く一本道、そこを塞ぐように巨大な猪がいたのだ。それも、かなり気が立っている様子の。

国広は焦った。通常の猪と比較すると確かにかなり大きいけれど、このくらいのもなら過去に捕らえたことがある。ただそれは、山伏と堀川という頼れる兄弟がいてこそその話だ。山伏が猪を押さえ、国広が弱らせ、堀川がとどめを刺す。その連携

があつてのことであつて。

少しふらついてしまうほど重い籠を背負った国広が、一振りきりで相手を出来るものではない。しかしそれでも、引くという決断は出来なかった。どちらにしても一本道なのだから、引けば引くほど追われるだけだ。

「……う、うう……、」

結論として、国広は負けた。突っ込んでくる猪を避けきれず左脚に衝撃を受け、背負う籠の重さもあつて体勢を崩した。その際に運悪く木に頭を打ちつけ、これまた不運なことに打ちどころが悪く気を失ってしまったのだった。

どれほど長い間気を失っていたのか、それはわからない。けれど木にもたれかかる形で眠っていた国広が目を覚ますともうすっかり日が暮れてしまっていて、辺りが真っ暗だった。十月下旬であり日没が早くなっていることを考えると、案外そう遅い時間ではないのかもしれない。ただ時計を持っていない国広には、判断のつかないことであつた。

打ちつけた頭の痛みと、倒れた際に捻りでもしたか、右足首にも痛みを感じる。これでは重い籠を背負つての下山どころか

まず立ち上ることさえ難しそうだ、と考えてから国広は思い出したようにハツとする。栗は無事かと。

背負ったままだった籠を下ろしてみれば、暗闇の中でもその中身がかなり減っていることがわかる。猪にぶつかられ、木に頭を打ちつけ、そのままずるずると身体を擦りつけるようにして座り込んで。籠が満杯どころか溢れて山のようになっていたのだ、ちょっとした衝撃でもぼろぼろと零れてしまうというのに立て続けに大きな動きがあつては仕方ない。

そして、その零れた分は猪に喰われたのだろう。彼らもまた生きるのに必死なのだ、もうじき冬が来ることを考えればなおのことその身に栄養を蓄えておかねければならない。そんな中で餌を山のように抱えた相手がいれば、これ幸いと向かつてくるのは仕方がないことだ。

ただ、国広にとつてはショックだった。自分の努力が水の泡になったことに対してではなく、長義や仲間達を満足させられなくなつてしまったということが。実際にはそれでもまだ十分な量の栗が籠の中に残っているのだけれど、国広の感覚としては足りないのだ。

しかし、栗を追加することは現実的ではない。もうすつかり暗くなつてしまつてゐるし、何より足の怪我也有。一振りでの下山すら困難なほどなのだ、もう一度山を登ることなど出来はしない。というより、してはいけないうらう。ただ怪我を悪

化させるだけだ。

戦場ならいざ知らず、こんなところで怪我をして身動きが取れなくなつてゐる自分を国広は恥じた。情けない。あまりにも情けなくて、涙が出そうだった。

「……っ！」

泣きつ面に蜂とはまさにこのことか、国広の手の甲にぽたりと水が落ちてきた。雨だ。

十月下旬、それも日没後に降る雨は冷たい。今はまだぼつりぼつりという程度であるけれど、本降りになつてしまつたらいいよ危ないだらう。戦場ではないところで怪我をして、さらに風邪まで引いたとなれば審神者に合わせる顔がない。

ただ、早く帰らなければという思いとは裏腹に身体が動かない。膝で立つことは出来ても、右足首の痛みが強くそれ以上が難しいのだ。まさか本丸まで膝歩きをする訳にもいかず、どうしたら良いのかわからない。

自分が欲張つたせいだ。欲張らず、籠が満杯になつた時点で下山していれば猪と鉢合わせることはきつとなかつた。猪と鉢合わせたりしていなければ怪我をして審神者の手を煩わせる

ことはなかったし、雨に濡れて風邪を引いてしまう可能性もなかったはずだ。

自分が身の丈を超えて欲張ったから。もつという、自分を戒めておきながら愚かにも夢を見てしまったから。とうとう国広の頬を雨とは違う熱い水が伝い、濡らしていく。

悲しかった。自分はただ長義に喜んでほしくて、褒めてほしくて、少しでも想いを伝えたくて。そして仲間達も同じように、喜ばせたくて。

ただそれだけだったというには、確かに多い。やはり自分は身の程をわきまえず、望みすぎてしまったのだろう。国広は自分への攻撃を繰り返し、ぐすん、と小さく鼻をすすった。

「……こんなところで何をしているのかな、」

ぽつりぽつりと降る雨が、しとしとに変わり始めた頃。聞こえるはずのない声につられて顔を上げると、腕を組み呆れたように大きな溜息をつく長義の姿があった。夜に輝く銀の髪を今は雨に光らせ、鮮やかな碧い瞳は咎めるように細められ、形の悪い眉も不機嫌そうに寄せられている。

国広はその姿を、幻覚かと思った。こんなところ。そう、長

義にとつてはまさにこんなところだ。得意なのは肉体労働より頭脳労働、汚れることや汗をかくことを嫌う。そんな長義が裏山に入ることなど、それこそ何かの行事や審神者による命令以外ではありえないだろう。

言葉を失っている国広に、長義はもう一度大きな溜息をついた。日が落ちて気温が下がった上に雨まで降っているのだ、早く帰らなければ二振りとも風邪を引くという笑えない事態になるだろう。

国広としても、それは避けなければいけなかった。自分のせいで長義が風邪を引くなど、あつてはならないこと。ただやはり、右足首の痛みが強くなり立ち上がることは難しい。

国広が右足首を抑えていることで察したのだろう、長義は背を向ける形で屈んでみせた。乗れ、といわんばかりに。

国広は激しく動揺した。体格の変わらない自分を背負いながら山を下りることは、長義にとつて非常に困難なことではあるはずだ。そこに大量の栗が入った籠の重さも加わるのだから、なおのこと。普段からそれこそ裏山で鍛錬に勤しみ、筋肉ですべてを解決しようとするようなタイプの刀であればまた違ったのだろうけれど。

「さっさとしろ、本降りになる前に帰るぞ」

「だ、だが、重い……」

「……は？なめられたものだね、俺は本歌山姥切だ。お前くらいどうってことはないよ」

「いや、栗が……」

「栗？」

訝しむように振り返った長義は、そこで初めて籠の存在に気づいたようだった。腰を浮かせてその中身を覗き込むと、三度目の溜息をつく。

きつと、長義の中ですべての点が繋がったのだ。日が落ちても帰還しない国広、山道、痛めた右足首、大きな籠にたくさん入った栗。つまり国広は栗拾いの帰りに転んで怪我をしてどうにもならなくなっていたのだ、と。

とんだ肩透かしを食らった気分だった。国広がどこにもいないと審神者が慌てふためくものだから長義も、表面上は冷静な素振りを見せていたけれど、内心は気がでなかったのだ。

一度目の溜息も二度目の溜息も、そして三度目の溜息も、長義にとっては安堵からのものだった。国広を見つけたこと、驚きのあまり言葉を失ってはいるけれど見たところ異常はなさそうであること、いわゆる家出の類ではなくただ栗拾いに出掛けただけであったこと。

間違いなく、長義は安堵したのだ。自分達の居住空間は強力な結界で厳重に守られているし、それを破られることはそうそうない。そもそも、何かが侵入したとなればその瞬間にわかるものだ。けれど、絶対にない話ではないから。審神者も自分達も気づかない間に何者かが侵入していて、いつの間にかすべてを壊され失ってしまうことは。

間違いなく、長義は安堵した。五体満足で、意識もしっかりあって、何か負の気配を纏っている訳でもない国広を見つけたことに。それを国広には伝えないし、そもそも自分自身で認めもしないけれど。

だから国広の目にはそうは映らない。長義は怒っている、呆れている、幻滅している。これでまたひとつ、俺のことを嫌いになってしまった。そう思っている。国広を傷つけるのはいいだって、国広自身であった。

長義が何も言わないから、国広が何も聞かないから。だからいつまでたっても、距離を縮めることができないのだ。

「……構わないよ、だから早く乗れ」

構わない、という声ではなかった。余裕そうな態度を見せて

はいたけれど、本当は国広単体でも長義にとつてはなかなか厳しいのだ。それが大量の栗を入れた籠ごととなれば、さすがに苦しいだろう。国広は、無理をするなど言いたかった。

けれど、長義はそれを言わない。厳しいとも苦しいとも、そんなことは絶対に言わない。本歌山姥切として、自尊心の付喪神として、絶対に言いたくないのだ。己の写しである、国広にだけは。

長義は別に国広を、写しを、己より劣るものだと思っている訳ではない。決して。伯仲の出来と称されるからこそ、本歌と写しが揃って重要文化財に指定されている唯一の例になっているのだから。

ただ、本歌とはこうあるものだという矜持がある。長義いわく、本歌は写しを軽々と背負ってやらなければいけない。生まれての赤子同然だった小田原時代ならいざ知らず、それがたとえ、己と変わらない体格にまで育った相手だとしても。そしてその相手が、さらに別の何かを背負っていたとしても。本歌たるもの、写しが背負っている何かごと背負わなければいけないのだ。余裕そうな態度を崩さないまま。

だから国広も、無理をするなどは言わない。写しの自分が本歌を相手に、そんなことを言えるはずもない。何も言わない長義と何も聞かない国広はいつも心がすれ違えばかりであるけれど、長義がどれほどの覚悟をもって今、自分に背を向けてく

れているのか。国広も、それがわからないはずはなかった。

だから国広は籠を背負い直し、長義の背に遠慮なく乗しかかる。ぐ、という小さなうめき声は、聞こえないふりをした。それが、写しから本歌に対する礼儀であるからだ。

「……それにしても、お前の食い意地には恐れ入る。そこまで栗が好きだったとはね」

雨の降る中、下りの山道を一步、また一步。国広と大量の栗が入った籠を背負う長義は、本歌としての意地と根性で歩き続ける。自尊心の付喪神の名は伊達ではない。

そして恐るべきは、国広に対する物言いがいつもと何ら変わらないことだ。嫌味、小言、文句。国広に何かしら言わなければ折れる呪いにでもかかっているのか、もしくは、身体的なつらさを誤魔化すためか。自分に対しても、国広に対しても。

どうやら長義は、国広が自分自身のために栗拾いに出掛けたと思っているようだった。いくら好物であってもその量をと呆れたような、どこか納得したような、長義の声にはそんな響きがある。いつも食事の際はご飯もおかずも大盛り、その上でおかわりをする姿を見ているため、疑っていないようだ。

ただ、国広にとつてそう思われるのは心外である。食い意地を張っているというのは普段の自分の姿を振り返ると反論できないけれど、今回は違う。長義に、今までで一番美味しい栗ご飯を食べてほしかったのだ。

いつもの国広なら、言葉をぐつと飲み込むだけだった。けれど、今の国広は違う。長義が、栗は置いていけと言わなかったことが嬉しかったから。それが長義自身の優しさではなくただ本歌としての矜持、自尊心からの行動であるとしても、国広を写しとして大切に想ってくれていることの証拠になる。

そのことが国広には、とても嬉しかったから。

「……これは、本歌の栗だ」

「は、……俺の？」

長義は、気を抜けば国広と栗ごと地面に倒れてしまいそうな状態であった。確実に本丸は近づいているはずだけれど、まだまだうんと遠くにあるように感じる。情けない姿をさらす自分を許せないため何とか必死に歩き続けているけれど、国広の言葉は心を揺らすに十分なものであった。

籠に入った大量の栗は、自分のものだという。少食という訳

ではないけれど、国広と違って食事を大盛りにしたりおかわりしたりということはしない。そんな自分になぜ、国広はこれほどの栗を。長義は、疑問をそのまま素直に表に出した。

「……………栗ご飯が好きなんだろう、燭台切にリクエストするくらいに」

雨が木々の葉を打つ音、互いの呼吸音、長義の矜持を保つべく必死な足音。それらの音に紛れる国広の、疑いようもない愛の告白を、長義の耳は逃さない。

確かに、燭台切とそのような話をした。覚えている。もうじき本丸に顕現して一年が経つからと、まるで子の誕生を祝う親のような台詞だと思ったことも覚えている。燭台切の純粋な優しさが少し、長義にはくすぐったくて。

ああ、そうか。日が落ちても帰還しない国広、山道、痛めた右足首、大きな籠にたくさん入った栗。長義の中で、すべての点が繋がる。本当の意味で。

国広は、自分のために。

「まったく、お前というやつは……だから偽物くんなんだ」

「……写しは偽物ではないが、」

「栗ご飯が好きなのはお前だろう」

「え、」

雨が木々の葉を打つ音、互いの呼吸音、長義の矜持を保つべく必死な足音。それらの音に紛れる疑いようもない愛の告白を国広は、聞き逃してしまうところだった。

確かに、自分は栗ご飯が好きだ。それは間違いないと、国広自身も思う。けれどそれは、皆もそうだ。栗ご飯を嫌いだという仲間はいないし、長義だってそうで。

「……俺が顕現した日の夕餉に、栗ご飯が出ていた。お前は美味い美味いと、大きな茶碗に山のようによそって、それでもまだ足りないとおかわりまでして……」

「そ、そうだったか、」

「そうだった。……俺の写しはこうまで食い意地の張った個体なのかと、恥ずかしく思ったから……よく、覚えている」

「……そうか、」

「……だからそれは、お前がたくさん食べると良い」

「………そうする。本歌の隣で、たくさん食べる」

「勘弁してくれないかな、………見ているだけで、満腹になってしまう」

雨が木々の葉を打つ音、互いの呼吸音、長義のいよいよ危なくなってきたらしい足音。それらの音に紛れようとする疑いようのない、長義と国広の愛の告白。

誰も知らない。誰も知らないけれど、自分達だけが知っている愛の話。

「きょうだいーい！」

麓から、堀川と山伏が走ってくる。筋肉自慢の山伏が国広と籠を受け取ろうとしたけれど、長義はそれを断った。ずっと自分を避けているようだった国広の、愛の重みを知ったから。

四日後、国広は長義に四回目の溜息をつかせることになるのだけれど、それはまた別の話。